

プラープター・ユン著、宇戸清治訳

『パンダ』

東京外国語大学出版会 二〇一二年四月

## 近くて近かったタイ

多くの日本人が、日本とタイとの関わりがこれほど深いと知ることができたのは、まったくもって今回のタイの洪水ゆえである（ちなみに隣接するカンボジアも甚大な洪水被害が出た）。日本人が日常生活でお世話になってくるさまざまな工業製品や食品が日本の市場に出回らなくなるであろうことが日本全国で報道された。最近の統計によると、観光にタイを訪れる日本人は年間百万人、タイに住む日本人は五万人近く、タイに進出している日系企業は千三百社を超えている。もうそろそろこのあたりで、私たち「知識人」は、あるいは「研究者」は、あるいは「文学者」は、タイの最新の文学作品について目を向けてもいいんじゃないだろうか。

とはいうものの、多くの「知識人」は、山のようにあるタイ文学の作品のどれが最も適当なのかわからないし、もちろんインド系文字のタイ語は読めない（ついでながらタイ文字はカンボジア文字をもとにして作ったものだが、カンボジア文字とは似て異なるもので、筆者は読み書きもできない）。

となれば、ここはもう日本におけるタイ文学研究の第一人者である本学の宇戸清治氏におすがりするしかない。タイムリー

なことに、宇戸氏お勧めの本は、本学の出版会から「アジア文学の新たな息吹を伝える新シリーズ〈物語の島アジア〉第一弾！」と題して出された『パンダ』なのである。

ところで『翻訳家列伝一〇一』（小谷野敦編著、二〇〇九年）という本がある。著者による序文によると、これは「近代日本の翻訳家列伝」であり、「良い翻訳家、ないしは世間的に知られた翻訳家」を一〇一人集めたものだという。物故者、点数の多い人を優先してあり、外大関係者がぞろぞろ出てくる（当然、本学学長も顔写真入り見開きで載っており、扱いは二葉亭四迷と同じ。「なかなかの『政治家』らしい」とコメントされている）。

内容は「1 明治・大正期の翻訳家」（16頁）、「2 フランス文学の翻訳家」（36頁）、「3 ロシヤ文学」（30頁）、「4 英文学の翻訳家」（54頁）、「5 ドイツ文学の翻訳家」（20頁）、「6 シナ文学」（18頁）、「7 推理・SF小説の翻訳家」（30頁）、「8 児童文学の翻訳家」（28頁）、「9 その他の言語」の翻訳家」（20頁）となっている。

注目するのはもちろんこの最終章である。概説によると、ここにはいる「その他の言語」というのは、スペイン語（本書ではイスパニア語）、アラビア語、ギリシア語、ラテン語、イタリヤ語、ノルウェー語、スウェーデン語、ハンガリー語、チェコ語、ルーマニア語、ブルガリア語、トルコ語、インドネシア語、タイ語、ビルマ語、ベトナム語、インドネシア語である。それらの言語の翻訳者として名前が挙がっている本学の教員は、宇戸氏ただ一人である。著者はとくに東南アジアの翻訳作品は「売れないであろうことは想像に難くない。あるいは、政治的な文学の翻訳が多いようだ」と書いているが、残念ながら『パンダ』

にはあてはまらない。

## ポストモダン文学『パンダ』

ではここで『パンダ』の内容を紹介しよう。といつても帯を見てもらうのが一番だ。「キミの生まれ星はどこ？ 地球に生まれ落ちたのは間違いだった。ある日突然そう悟った主人公が、みずからの故郷の星を探して帰還をめざす。タイのポストモダン文学の旗手による、現代社会への鋭い風刺の精神と、人間への愛と寛容にあふれた新世紀の物語」なのである。すでに多数の書評や紹介記事がメディアに出ているし、『パンダ』の著者とも親交が深い四方田犬彦氏が五千二百字にもわたって「古代ギリシャやローマの文人」にはじまる解説を書いておられ、宇戸氏自身もタイ現代文学の概説と最新の文学シーンの状況について九千字近いあとがきを書いておられる。だからこれ以上、筆者がどうこう書くまでもなく、すぐさま『パンダ』に突入するのが賢明だ。

それで、さつきから連呼しているタイトルの「パンダ」だが、主人公「ボク」の愛称である。R指定ビデオ（男性専用と言いつても目の周りに濃いクマができやすいタチ）なので、このような愛称になつていたのである。

次に抱腹絶倒間違いなしの表現をいくつか紹介しよう。「ボク」の妹がいつもきくヒップホップは、「わが家に遅しい大男

の黒人がぎゅうぎゅう詰めになり、みなで寄つてたかつて家を壊そうとドスドスンと床を踏みつけている」ように大音響だし、暑がりの「ボク」に向かって社長が「お前はとうしてクマのオイスターソース炒めみたいに汗まみれなんだ」と言つたり、はたまた女優選考のためにナイスバディの女性たちの集まった様子を「一階の小さな接客室はすでにおっぱいでむせかえつていた。ボクはかつてこれほどたくさんのおっぱいによつて呼吸用の空気が奪われていると感じさせる部屋に入ったことはなかった」などなど。

こんな想定外ばかりの舞台設定なのだが、「ボク」の語る一言一言は味わい深い。「ボクたちは興味のあるものか、変わったものしか見ようとしなない」「同じ星から来ていない人間の行く末に誰が興味を持つだろう」「多くの大人たちは、若者は国の未来であり、安心して暮らせる社会をこれらつぶらな瞳の子どもたちに残さねばとよく言う。しかし、事実はそれとはまったく違う。ボクが思うに、彼ら大人たちは、本当は何の関心も持つてはいない。キミたちもやはり興味がない。ボクだつて同じだ。人間はみんな、今現在の自分にしか関心はない」「人類一人ひとりの究極の目的は、自身が本当に生まれるべきだったプラットフォームを探すことであり、それを知つたうえで、自分の星へきちんと帰れる方法を一生懸命に考えることなのだ」どれも『星の王子さま』並みに世界中で受け入れられそうな言葉ばかりだ。

バンコクに拠点を置くアーティスト

英語で紹介される著者プラープダー・ユンのプロフィールは、writer, novelist, artist, graphic designer, magazine editor, screen-writerであり、カタカナ以外の日本語にしてよさそうなのは、一番最初の作家、ぐらいだろうか（ちなみにプラープダー氏は宇戸氏のことを a great karaoke singer と自身のブログに書いている）。浅野忠信が主演した『地球で最後のふたり』（二〇〇三年）、『インビブル・ウェーブ』（二〇〇六年）の脚本も手掛け、さらに『ロリータ』『時計じかけのオレンジ』『ライ麦畑でつかまえて』を翻訳、また音楽、キュレーション的な活動もしている。最近では京都の創作プラットフォーム SANDWICH に滞在し、アートプロジェクトに参加している。タイ人の、とかタイ出身の、ではなく、「バンコクに拠点を置くタイの小説家・アーティスト」なのである（ちなみに一部のファンの間では「プラープダー王子」と呼ばれるほどのルックスの持ち主で、最近はその磨きがかかり修道僧のような雰囲気醸し出している）。

一方、宇戸氏は、プラープダー氏の『鏡の中を数える』の翻訳者として答えたインタビューにおいて、自らの翻訳手法を以下のように述べている。

僕の翻訳手法はこれまで日本で訳されてきたタイ文学とは決定的に違う方法をとっています。それは、文意を補う必要のある箇所以外は、できるだけ注釈をつけないということ。過去に翻訳されたタイ文学には「注」が多すぎるんですよ。他の国の文学にはなくても、東南アジア文学となるとなぜか「注」が多かつ

た。

おかげで『バンド』はすつきり読めるし、文学の本質に迫れる。プラープダー氏の作品は宇戸氏が日本語に翻訳するからこそ生きてくるのだ。

（岡田知子）